

芸州亀居城跡

——第1・2次発掘調査報告——

大竹市教育委員会

再版にあたって

慶長年代の城郭を知る極めて貴重な文化遺産である「亀居城跡」は、昭和53年10月及び、翌54年7月の二度に渡る発掘調査が、広島県教育委員会のご指導を受けて行なわれ、その概要報告書である「芸州亀居城跡」が昭和55年3月関係各位の並々ならぬご努力により、発刊されたところであります。

しかしながら、その後9年が経過し、残りの冊数もあまりなく、又、市民の方々からの広く頒布して欲しいとのご要望に応え、今回既刊「芸州亀居城跡」の再版を行なう運びとなりました。

今回もいろいろな関係の方々のご指導ご助言をいただきましたことに対しまして、心から感謝申し上げますとともに、郷土の理解を深める一つの資料として広く市民の方々のご活用をお願いしてやみません。

平成元年3月31日

大竹市教育委員会

教育長 田 中 弘 明

序 文

このたび、発掘調査を行いました「亀居城跡」は、関ヶ原の合戦後、広島へ入部した福島正則により広島城の支城として、防長二国を支配する毛利氏に対抗する拠点として築城されたもので、慶長13年(1608年)、5年の歳月を費し完成したものの3年後の慶長16年(1611年)、徳川幕府の圧力により取りこわされたと伝えられている城です。

「亀居城」という城名の由来は、その全体の地形が亀の伏した形に似ているところからそのようによばれるようになり、春には染井吉野の咲きほこる桜の名所として近郊では広く知られています。

昭和52年、本丸跡の大規模な当時の石垣出土が端緒となり、翌年10月広島県教育委員会のご指導を受けて、現地発掘調査を開始し、その結果、新たな遺構と遺物が多数出土し、慶長年代の城郭を知る貴重な文化遺産であることが確認されたのであります。

本格的な発掘調査は、大竹市では初めてのことであり、市民の方々の関心は非常に高く、この発掘調査の概要報告が待たれていたところですが、このほど内容がまとまり刊行のはこびとなりました。

亀居城跡についての知識を得られる上で、この報告書をご利用いただき、更に郷土の理解を深める一つの資料となれば幸甚かと存じます。

おわりに、発掘調査についてご指導いただきました広島大学工学部鈴木充教授、広島県教育委員会事務局文化課西本省三課長及び大竹市文化財審議会委員の各氏をはじめ、発掘調査リーダーとして労苦され、この報告書のご執筆をいただいた同じく県教委文化課新谷武夫指導主事に厚く御礼申し上げますと共に、現地発掘調査に積極的にご協力いただいた亀居城保存会や地元関係者の皆様に心より謝意を表します。

昭和55年 3月31日

大竹市教育委員会

教育長 豊島岩雄

目 次

I. は じ め に	(1)
II. 位 置 と 沿 革	(2)
III. 郭の規模と配置	(4)
IV. 調 査 の 概 要	(8)
V. 検 出 の 遺 構	(9)
VI. 出 土 遺 物	(16)
VII. 総 括	(21)

挿 図 目 次

第1図	広島城とその支城の位置図
第2図	亀居城周辺地形図
第3図	亀居城古絵図模写
第4図	亀居城全体図
第5図	亀居城主要部地形図
第6図	亀居城本丸全体図
第7図	亀居城本丸遺構全体図
第8図	SX9 石階段実測図
第9図	SB5・7・8建物跡実測図
第10図	SB5建物跡・SK6土壙実測図
第11図	本丸排水溝部分図
第12図	本丸北区南北断面図
第13図	本丸出土瓦実測図Ⅰ
第14図	本丸出土瓦実測図Ⅱ
第15図	本丸出土遺物実測図
第16図	石垣刻印拓影
第17図	本丸石垣復元想定図

図 版 目 次

図版1 a	城跡周辺航空写真
b	本丸遠景
図版2 a	本丸調査前近景
b	本丸全景
図版3 a	本丸天守台全景
b	天守台礎石群
図版4 a	SB2付櫓全景
b	SB3北渡櫓全景
図版5 a	SX9石階段近景
b	SX9石階段・SB4建物跡全景
図版6 a	SB5建物跡・SK6土壙・SD10排水溝全景
b	SK6土壙近景
図版7 a	SB7・8建物跡全景
b	SD10排水溝
図版8 a	本丸西側石垣全景
b	第1号井戸全景
図版9 a	瓦堆積状態
図版9 b	瓦出土状態
図版10	本丸出土瓦Ⅰ
図版11	本丸出土瓦Ⅱ
図版12	本丸出土遺物

例 言

1. 本報告は、亀居公園整備（広島圏都市計画4・4・101号）に伴う亀居城跡（広島県大竹市小方二丁目所在）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、大竹市教育委員会が、広島県教育委員会文化課指導主事新谷武夫の指導を得て、実施した。
3. 本書の執筆は、Iを瀬田晃、その他を新谷武夫が行なった。執筆にあたり、広島大学工学部鈴木充教授の指導と助言を受けた。
4. 本書の編集は、新谷が行なった。
5. 城の名称は、亀居城の他、小方城といわれるが、本書では前者をとった。郭の名称は、上田家蔵の絵図（文久元年＝1861年作図）に拠った。
6. 遺構の表示記号は、SB＝建物跡・SD＝排水溝・SK＝土壌・SX＝その他とした。
7. 第2図に使用した地形図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭55中複、第18号。
8. 本書の作成にあたっては、末永栄・岡野正昭・山本豪・崎田欣二各氏の助言、協力を受けた。
9. 本文中（Ⅳ・Ⅴ章）の方位の記述は、便宜上山側を北とし、海側を南とした。

I. は じ め に

亀居城跡（小方城跡）は、大竹市小方2丁目にある標高約88メートルの山（通称、城山）に所在する近世の平山城で、背後は急峻な山をひかえ、旧山陽道を南北に一望する海に面した絶好の地に位置している。

亀居城跡のある辺りは、一時期個人や企業の所有する私有地で、中腹近くまで宅地化がすすみ、壮麗な当時の城郭を想像させる景観を失いつつあった。

しかし近年、文化史跡として、また市民の憩いの場として保存活用の声が高まり、昭和47年頂上一帯を大竹市が所有するところとなり、本格的に史跡公園として整備の手が加えられることとなった。

雑木林となっていた頂上付近からは、当時の本丸跡の石垣や礎石らしき石、また種々の瓦の破片等が現地調査のたびに発見されており、都市整備課による「亀居公園整備事業」の実施と相俟って、大竹市教育委員会においても現地発掘調査を実施すべく検討を行っていたところ、偶然にも昭和52年11月、頂上周辺を掘削中、本丸天守台の西側部分の雑木におおわれた土中から、最も高い部分で約4.5メートル、長さ25メートルにわたる当時の大規模な石垣が掘り出された。

この石垣の遺構出土を早速、広島県教育委員会へ届け出たところ、昭和53年7月文化庁長官から文化財保護法により緊急発掘調査を実施するよう通知をうけた。

こうして、昭和53年10月、単市事業として大竹市教育委員会が主体となり広島県教育委員会事務局文化課の指導のもとに、文化課新谷指導主事を調査リーダーとして現地発掘調査が開始されることになった。

第1次調査は、10月16日～11月2日までの16日間、本丸跡のうち天守台とその周囲の石垣を主とした調査を実施し、翌54年7月16日～8月18日までの30日間、本丸跡のうち天守台以外の全域を対象に第2次調査を実施した。

前後2回の発掘調査を実施したため、都市計画亀居公園事業による本丸跡付近の工事は一時中断し、予定工期を大幅に遅らせることとなった。

また、発掘態勢の不備、発掘作業の不慣れ、作業員の確保等多分の苦労があったが真夏の炎天下で実施した第2次調査において、作業に従事された地元の方々、発掘調査完了まで頑張りとおした学生アルバイト諸君に記して感謝の意を表したい。

Ⅱ．位置と沿革

位 置（第1・2図：図版1a）

大竹市は、広島県の西南端に位置し、小瀬川を境界として山口県に接している。広島市から約30kmの距離で、瀬戸内海に面し、平野部は狭く、すぐ背後には急峻な山々が連なっている。

亀居城は、小方の城山を利用して造られた近世初頭の平山城である。小方の地は、古代山陽道の宿駅（遠管）が置かれたと推定され、古くから交通の要衝であった。苦の坂峠を下り、小瀬川を渡るとそこは周防で、関戸が次の宿駅である。関ヶ原の戦の後、福島正則は広島城を本城として、神辺・鞆・三原・三次・東城・小方の6ヶ所に支城を設置した。小方の城山は、元来桜山と呼ばれていた独立丘陵で、北東方向に直接広島城を望見することが可能である。城山と海とは接しており、狭く陰しい苦の坂を一望でき、陸路の首をおさえている。また、西方から広島への航路を良く見渡すことができる。それらの条件から、小方の城は、西方毛利氏に対抗する軍事拠点として、陸路・海路を制圧する為に絶好の立地をなしていたといえるであろう。

沿 革

●慶長五年（1600） 関ヶ原の戦で、豊臣方に味方した毛利輝元は、広島から萩へ移封されることになった。

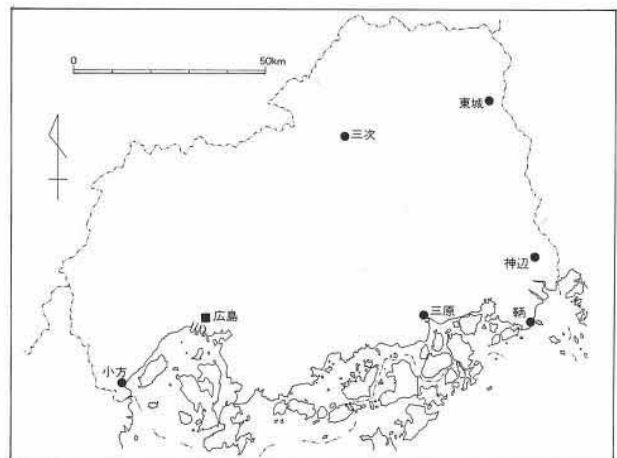
●慶長六年（1601） 福島正則が、尾張清洲城から、広島城へ入城した。

●慶長八年（1603） 亀居城を構築するため、おいの福島伯耆を派遣して工事に着手した。

●慶長十三年（1608） 城の工事が完成した。

●慶長十六年（1611） 幕府の圧力により、城を破壊せられ、以後廃城になった。

（註）城山の南麓には、古い五輪塔があり、中世から城として使われた可能性もある。



第1図 広島城とその支城の位置図



第2図 亀居城周辺地形図 (1:50,000 大竹)

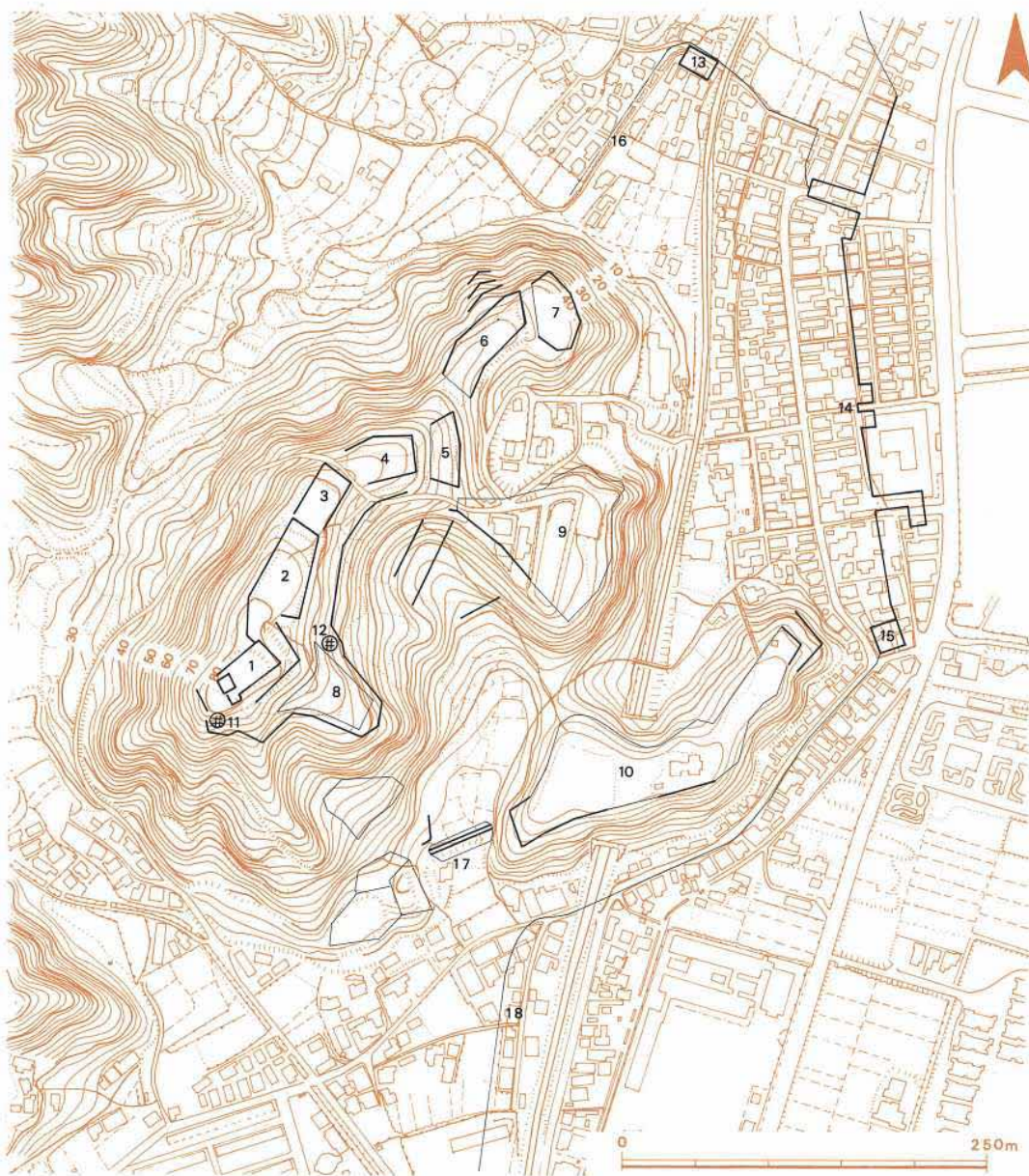
Ⅲ. 郭の規模と配置 (第3・4図)

総面積 992a(十町歩)で、周囲は約1.9km(十八町)を測る。郭の規模は、鐘の丸が最も広く(約2,400m²)、五郭が最も狭い(約700m²)。その他の郭は、ほぼ1,000～1,500m²である。郭の形は、本丸・二の丸・三の丸は、ほぼ矩形に近いが、他のものは不整形である。本丸・天守台の標高は88.5m、最も低い妙現丸は約30mである。

郭は、総数10ヶ所認められ、そのうち7郭はほぼ一列に高低差をもって並んでいる。残りの3郭のうち、2郭は、それらから派生した尾根に位置し、残りの1郭はさらにそれから派生した尾根頂部全体を利用している。城山の周囲は傾斜がきつく天然の要害であるが、なお更に嚴重に石垣をめぐらしている。特に谷部（妙見丸西方）をさえぎる石垣は、嚴重であり、少なくとも4列認めることができる。そのうち最前部のものは、高さ約10m、長さ約48mで、非常に強固なものである。



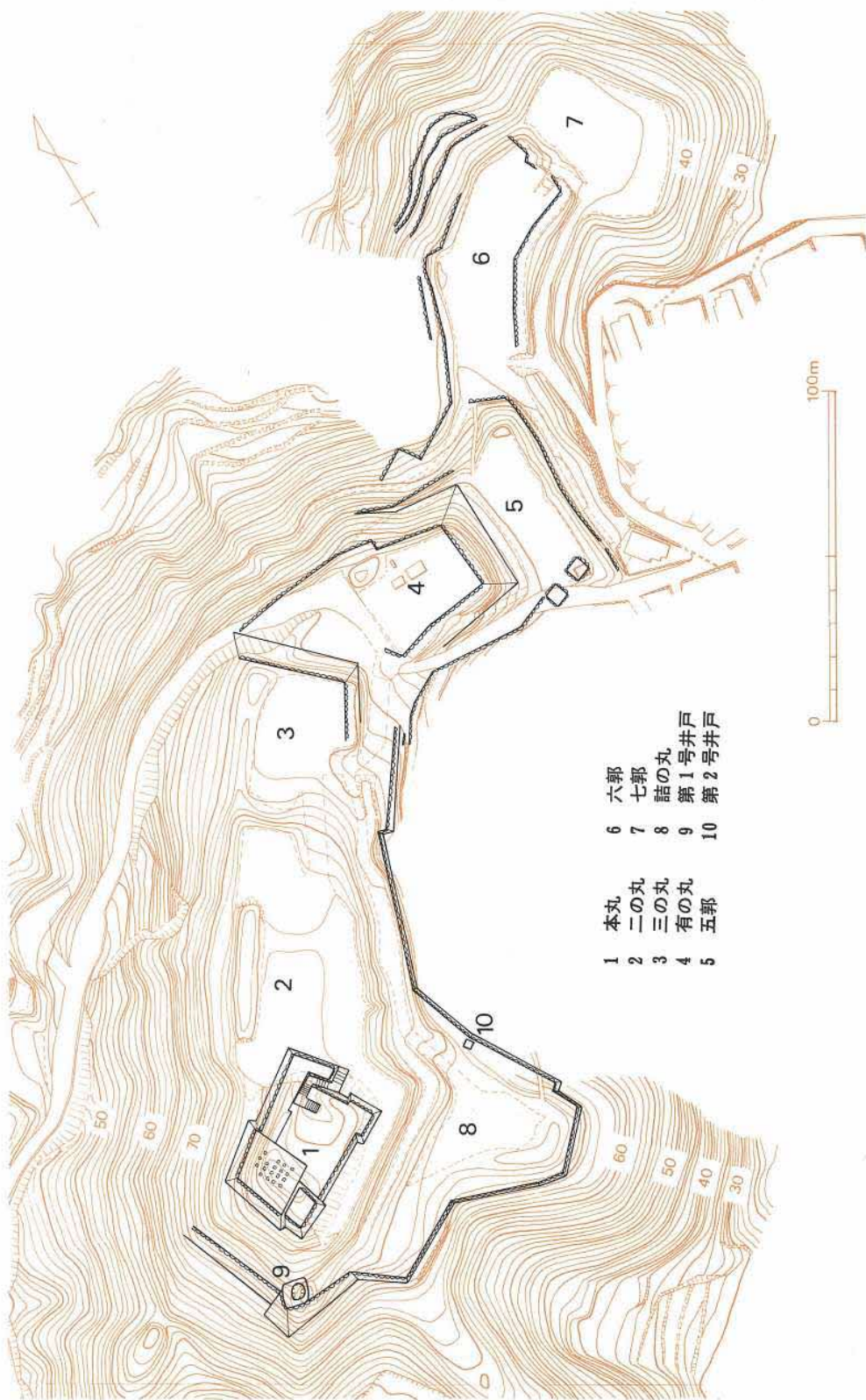
第3図 亀居城古絵図模写〔上田家蔵絵図より、文久元年(1861)作図〕



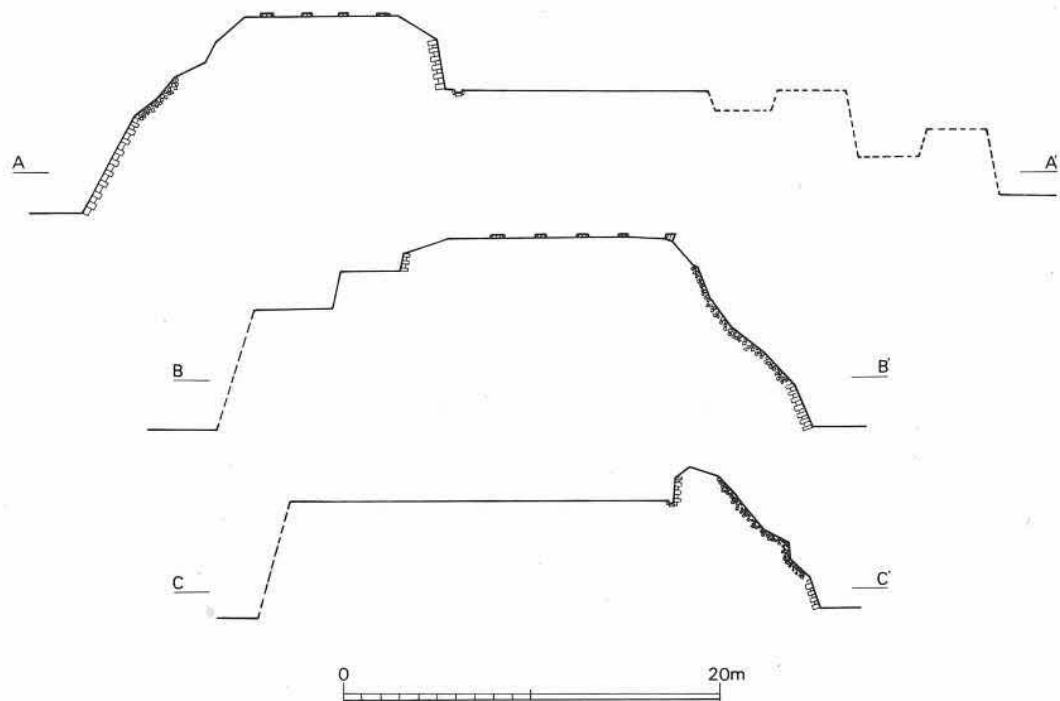
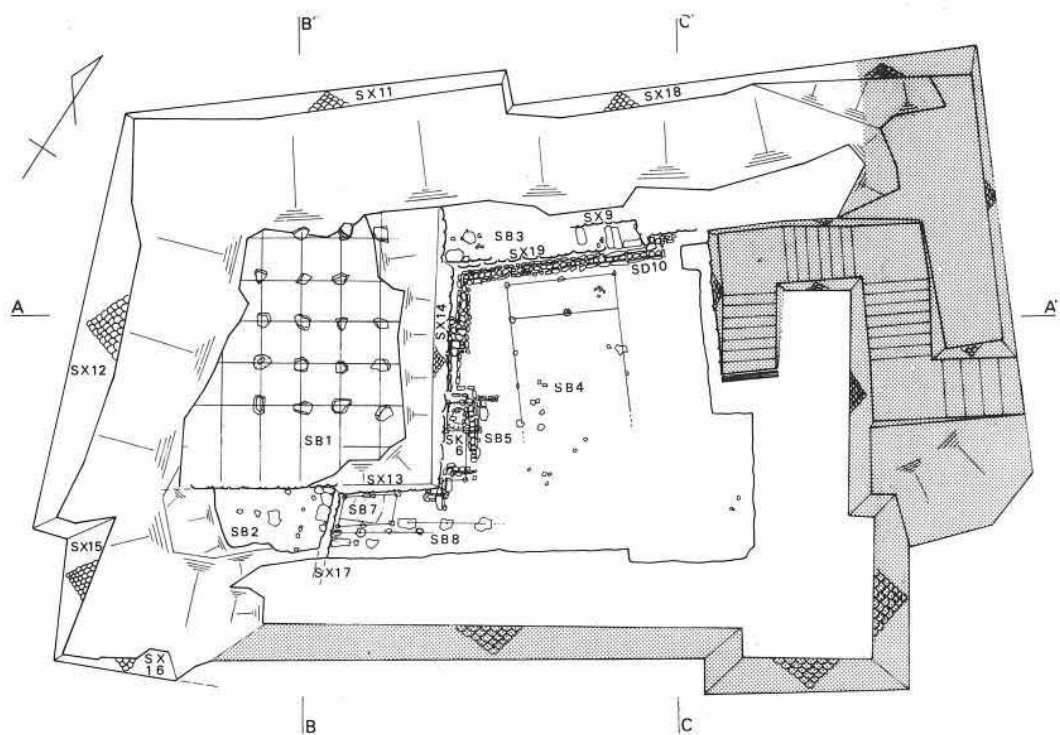
第4図 亀居城全体図 (1:5,000)

1. 本丸 2. 二の丸 3. 三の丸 4. 有の丸 5. (五郭) 6. (六郭) 7. (七郭)
 8. 詰の丸 9. 鐘の丸 10. 妙現丸 11. 第1号井戸 12. 第2号井戸 13. 北櫓
 14. 大手門 15. 櫓形 16. 堀 17. 石垣 18. 当時の推定海岸線

(註) 和田家絵図によると11郭となるが、それは本丸を天守台と二の丸に分けたことに起因するものである。但し、妙現丸については、位置からみて和田家絵図の名称と合致するので、それを使用することとした。



第5図 亀居城主要部地形図 (1:2,000)



第6図 亀居城本丸全体図 (1:400) (レベル=80.0m)

注、アミ目は新築石垣

Ⅳ．調査の概要

1. 第1次調査（第7図）

昭和53年10月16日から11月2日まで、延べ16日間調査を行なった。本丸天守台とその周囲の石垣の確認を目的として行なった。その結果、天守台において、3間×4間分の礎石群（現存数17個）を検出した。それらは、抜き取られたり、若干位置が移動しているものもみられたが、比較的良い残存状況であった。また、天守台の東側において、建物跡と排水溝を、南側で、付櫓及び建物礎石群を検出した。

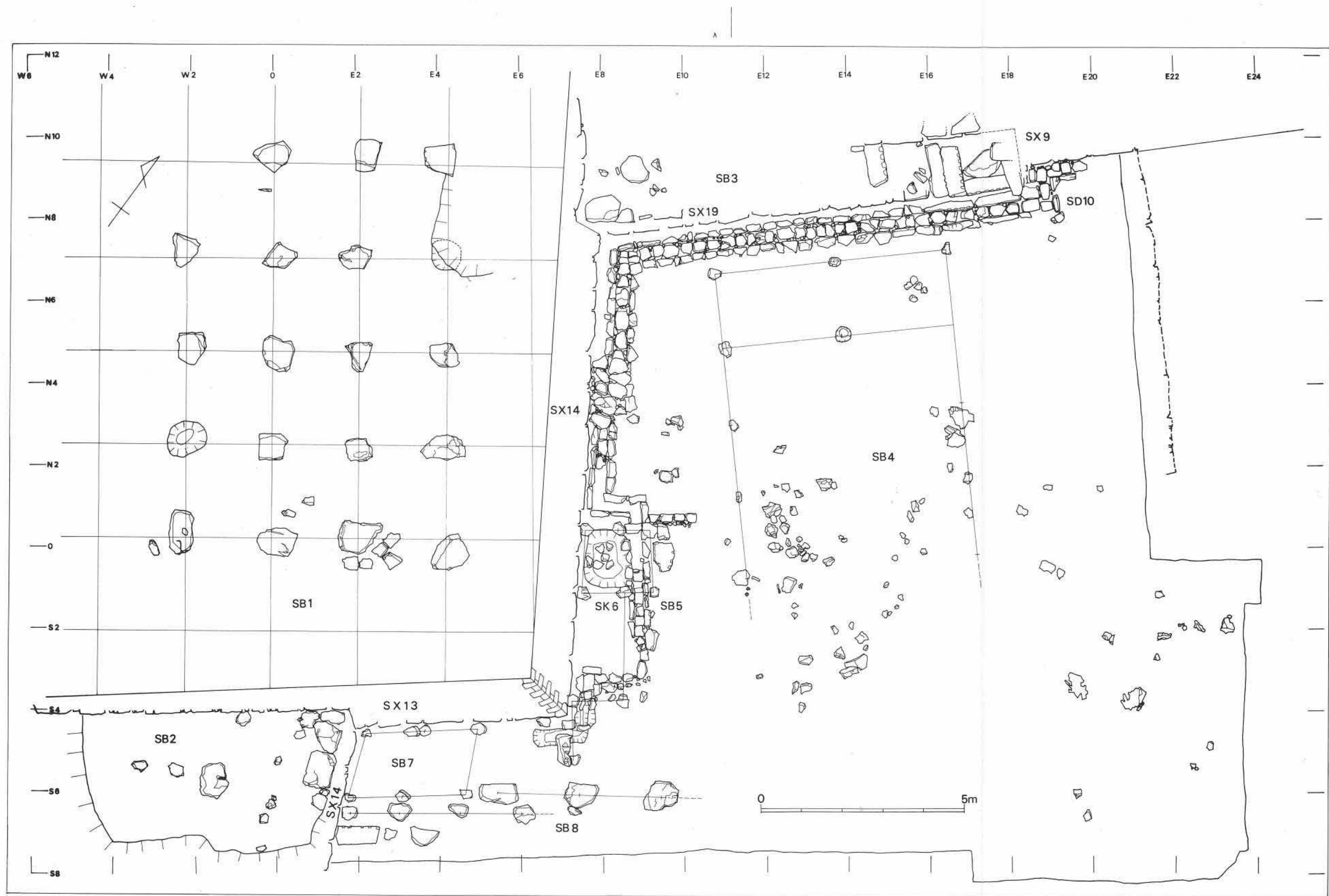
2. 第2次調査（第7図）

昭和54年7月16日から8月18日まで、延べ30日間調査を行なった。第1次調査の成果をふまえて、天守台以外の本丸全域の遺構確認を目的として行なった。その結果、付櫓部において、建物礎石群を検出し、排水溝がさらにのびて、北渡櫓の裾部にもめぐっていることを確認することができた。また、削平がかなり進んでしまった部分においても、1棟分の建物礎石群の存在が判明した。

建物跡は、本丸・付櫓の他、4ヶ所において確認された。いずれも礎石の大部分を欠失していて、今一つその全容をうかがうことのできないものであった。排水溝は、延長して、石垣裾をきれいにめぐっていたが、始点・終点の部分については、破壊されていて、判然としないものであった。一部では、暗渠となっていた。SK6土壌はSB5建物跡に付属するものであるが、その性格を明確にする遺物は出土しなかった。また、北渡櫓において、石階段が取り付けられているのが判明した。遺物は、瓦がほとんどで、青磁・鉄釘はわずかであった。瓦は、石垣裾から大部分破片で出土した。



調査風景（右・第1次、左・第2次）



第7図 亀居城本丸遺構全体図 (1:100)

V. 検 出 遺 構

概 要 (第7図：図版2b)

2次にわたる調査により、建物跡7・排水溝1・土壇1・石階段1を検出した。建物跡は、いずれも礎石を伴うものである。SB1は天守台、SB2は付櫓、SB3・8は渡櫓と考えられる。天守台を北西隅におき、そのすぐ南に1.7mの段差をもって付櫓をとりつけている。渡櫓は、天守台北東隅と付櫓の東辺からいずれも東へのびている。その長さについては、22~25m前後のものであろうかと考えられるが、本丸の東半部、南半部において、既に整備の為の工事が進んでいて不明である。また北渡櫓の中央よりやや西には、石階段がある。SB4・5・7建物跡は、SB1・2・8に比較して、かなり小さな礎石を用いた建物である。SB4は、2×4間分の礎石を確認しているが、それはさらに南へのびる余地がある。SB5は、SK6土壇を伴う建物で、7つの礎石が結びつくと考えられるが、全容ははっきりしない。SB7は、1×2間分の礎石があり、プランは東方向へねじれて平行四辺形状に歪んでいる。SD10排水溝は、天守台南東から屈曲しつつ北上し、付櫓部で折れて、東進し、石階段のすぐ東までのびている。一部暗渠になっているのが特徴的である。

1. 天守台 (SB1) (第6・7図：図版3)

天守台は、本丸の北東隅にあり、礎石の据えられた面の標高は88.5mである。天守台西側石垣(図版8a)の基底面からの比高差は、10.6mを測る。西側石垣の勾配は、約70度で、それから推定すると、天守台の平面形は、一辺13~17.5mのやや台形に近い不等辺四角形(第17図)で、面積は、約250m²である。

礎石は、3間×4間分の礎石群(現存数17個)を検出した。礎石は、いずれも削平した地山面(風化した岩で、一辺2~3cmの小角礫が多い)に据えられていた。礎石は、一辺0.6~1m、厚さ0.4~0.6mの大きな花崗岩を用いている。多少動いたものもあるが、ほとんど良く原位置を保っている。柱間は東西2.10m(7尺)、南北2.25m(7.5尺)等間である。建物の南北軸方向は、N36.5°Wである。

天守台の建物は、復元推定される面積から考えて、東へ1間、西へ2~3間、南へ2間、北へ2間分の余地があり、東西7間、南北7間の天守閣が想定される。しかし平面形は非常に歪んでおり、残存礎石の軸方向に近いのは、東辺と南辺のみである。

2. 付 櫓 (SB2) (第7図：図版4a)

本丸南西隅にあり、石垣基底面からの比高差は8.5mである。天守台の南辺の西半部に取り付けられ、東辺は天守台南辺と直交せず、13度西にふれている。残存する石垣の勾配(約70度)から推定すると、東西10~11m、南北6~8mの不等辺四角形を呈している。東辺からは、SB8建物跡が取り付くと考えられ、それとの比高差は2.2mである。礎石になりうると考えられる石は、大(一辺1m以上)2、小(一辺50~60cm)4がみられるが、残存面積が、総面積(約80m²)の約5分の1のみであり、全容ははっきりさせることができない。

3. 渡 櫓

a. 北 渡 櫓 (SB3) (第7・8・17図：図版4b・5)

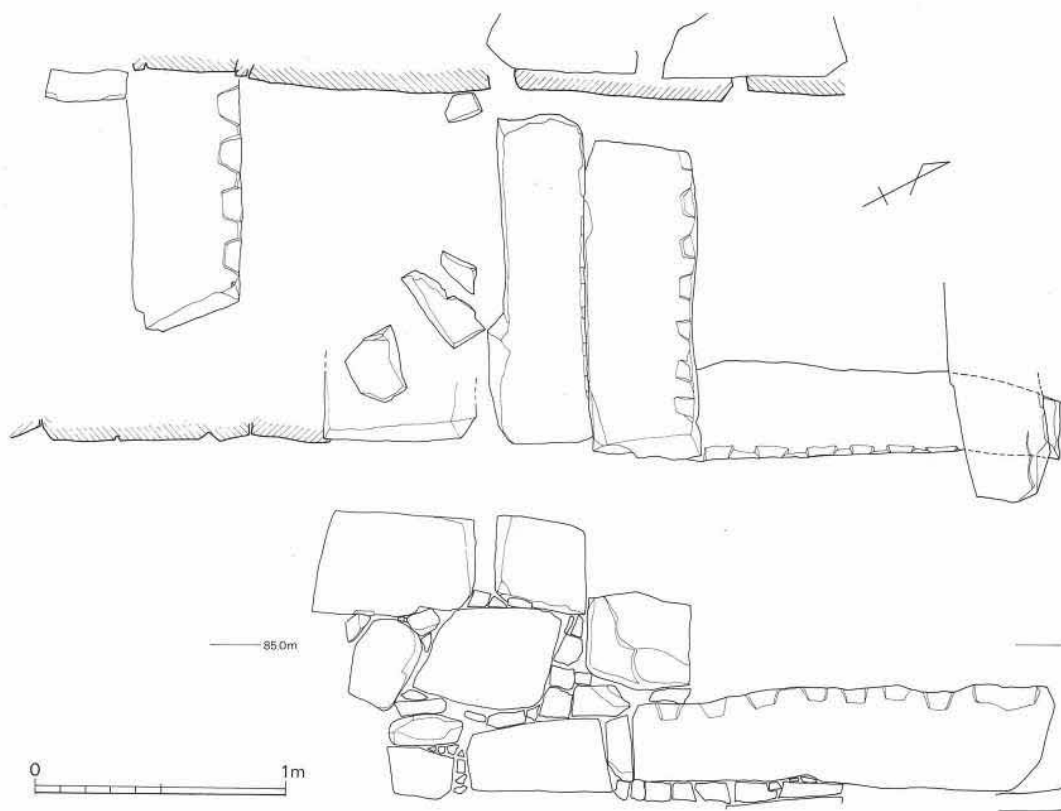
本丸北辺に設けられ、石垣基底面からの比高差は、石垣勾配(約70度)から推定して、7.6m程度と考えられる。天守台北東隅から、約9度北にふれて東にのびる。東端部は、既に整備工事が進み、はっきりさせることはできないが、25m程度で、30mを越えることはなかったと考えられる。天守台との比高差は、約1.7mで、付櫓とほぼ同じレベルであった。西端付近には、大きな礎石が2個みられる。幅は、5~6mで、石階段から東では、1m幅が狭くなっている。

SX9石階段 (第8図：図版5)

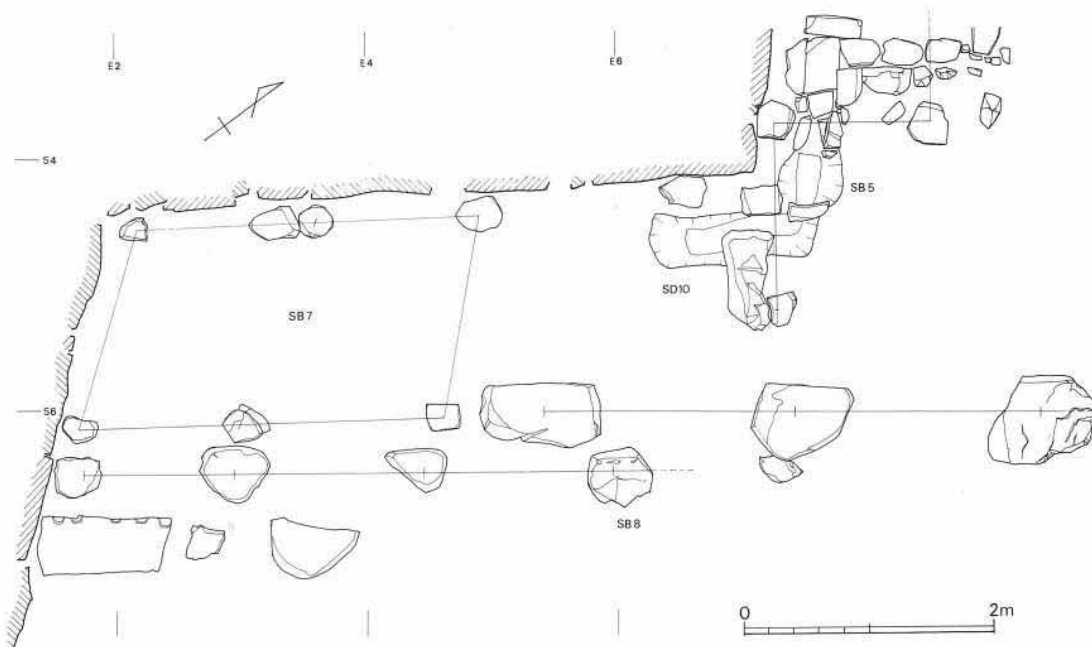
渡櫓南辺の中央より、やや西に設置されている。幅は、1.3mで、3段あり、1段ずつの高さは、30~40cmである。厚さ、幅約40cm、長さ120~160cmの角柱状の花崗岩を横にして踏み石としている。1段登った所に踊り場があり、そこから左に折れて2段ほどある。西端の大きな石が、踏み石かと思われる。

b. 南 渡 櫓 (SB8) (第9図：図版7a)

本丸の南辺に位置し、石垣基底面からの高さは、約6.7mである。付櫓の東辺から東にのび、付櫓との比高差は2.2mである。長さ、幅とも不明であるが、長さは30mを、幅は6mを越えない。2列の礎石群が残っているが、この石列の相互の関係は、はっきりしない。北側の列は、礎石が3個で、一辺1m程度の大きなもので、柱間は2m(6.5尺)等間である。南側の列は、付櫓の基底面からのび、40~50cmの小さな石を用いている。柱間は、西端が1.2m(4尺)で、その他は、1.5m(5尺)の等間である。いずれも、天守台南辺とほぼ平行(交角2°)である。



第 8 図 SX 9 石階段実測図 (1:30)



第 9 図 SB 5・7・8 建物跡実測図 (1:60)

4. 建 物 跡

a. SB 4 建物跡 (第7図：図版5b)

本丸内のほぼ中央に位置し、天守台との比高差3.9m、北渡櫓との比高差は、1.9mを測る。現在、2間×4間分の礎石（現存8個、辺長2～30cm）を検出している。軸方向は、北渡櫓と直交するが、天守台とは平行でない。余地からみて、南にのびる可能性はあるものの、東には、SX 9石階段への通路がなくなるので、のびないものと考えられる。柱間は、東西が3.0m（10尺）と2.85m（9.5尺）で不等間、南北は、1.8m（6尺）の等間である。南北の軸方向は、N44°Wである。この建物跡とSB 3北渡櫓の間隔は、非常に狭く、約1.3mにすぎないことは注意すべきことである。また、南へのびる余地は、約5m（2間分）で、この建物は、2間×4～6間の比較的簡素な（礎石の大きさからみて）ものであったと考えられる。

b. SB 5 建物跡 (第10図：図版6)

この建物は、SB 4・8建物跡と天守台にはさまれる場所に位置し、天守台との比高差は、3.9mである。現在、9個の礎石（辺長30cm程度の小さなもの）が結びつくものと考えられる。そのうちSK 6土壇を覆う6個の礎石群は、一つのまとまりとして考えることができる。この礎石群は、ほぼ台形の位置にあり、東西158cm（5尺）と180cm（6尺）で、南北152cmと154cm（5尺）である。東西の柱間は、一定でない。また、それらの南にある3個の礎石は、軸方向からみて、一つの建築物の礎石群の一部と考えることができる。SK 6土壇の東側には、踏み石と考えられる大きな石がみられ、その北側には、東にのびる石段がみられる。この石段は、排水溝に接し、現在1.2m東にのびている。この建物の東側は、工事による削平がひどく、移動した礎石はみられるが、原位置をつかむことはできなかった。

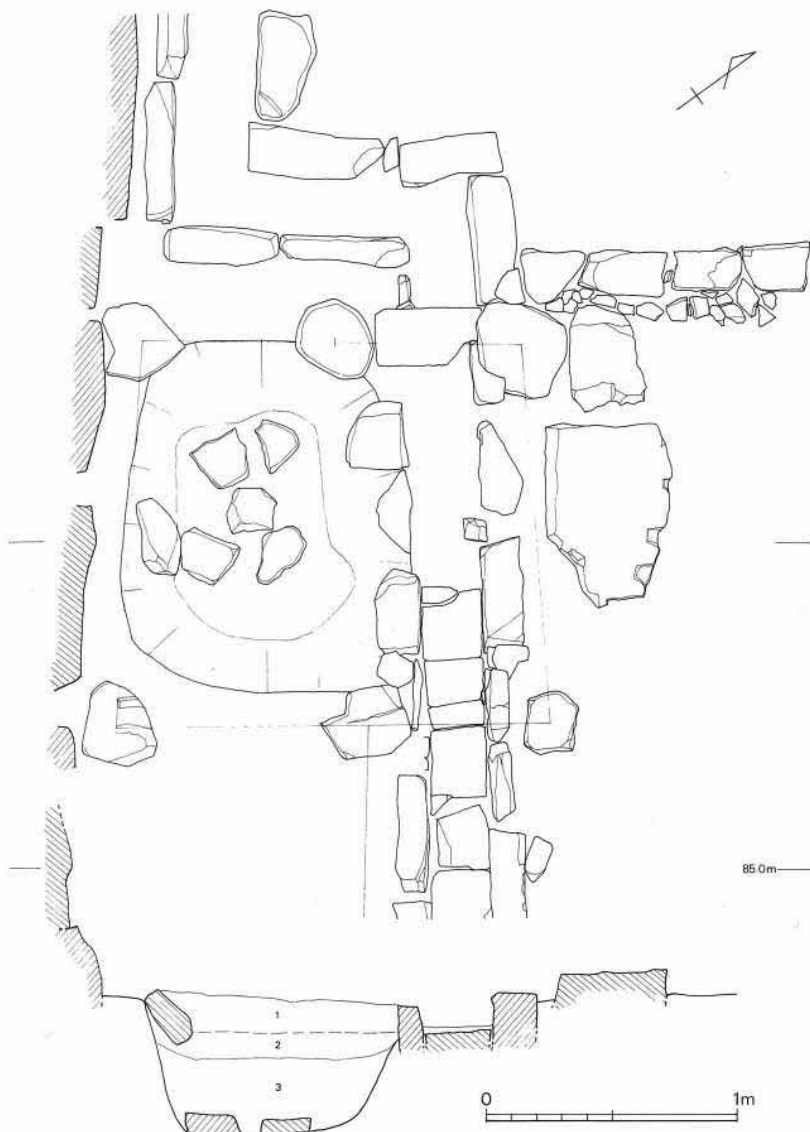
c. SK 6 土壇 (第10図：図版6b)

SB 5建物跡に覆われるものである。上端で東西1.1m、南北1.4mを測り、下端で東西0.6m、南北0.9mを測る。深さは、55cmで、底に5個の板石（辺長約20cm、厚さ10～15cm）を並べている。壇内の下半には、暗灰色土がつまり、中央付近には、若干木炭を含む層がみられた。この土壇は、天守台東石垣裾にほぼ接して掘られているが、性格については、明確な決め手がない。

d. SB7 建物跡 (第9図: 図版7a)

天守台南辺、付櫓東辺、南渡櫓にはさみこまれた位置にある。天守台・付櫓との比高差は、それぞれ3.9m・2.2mで、南渡櫓とは同一レベルである。現在、1間×2間分の礎石(辺長約30cm)6個が揃っている。プランはほぼ平行四辺形で、東西275cmと290cm、南北163cmと164cmである。北辺、南辺の柱間は、不等間で、建物のつくりとして、かなり雑な礎石配置となっている。この歪みは、天守台と付櫓にあわせたために生じたものであろう。また、礎石の大きさが、小さいこと、柱間が不等間で、かつそのプラン

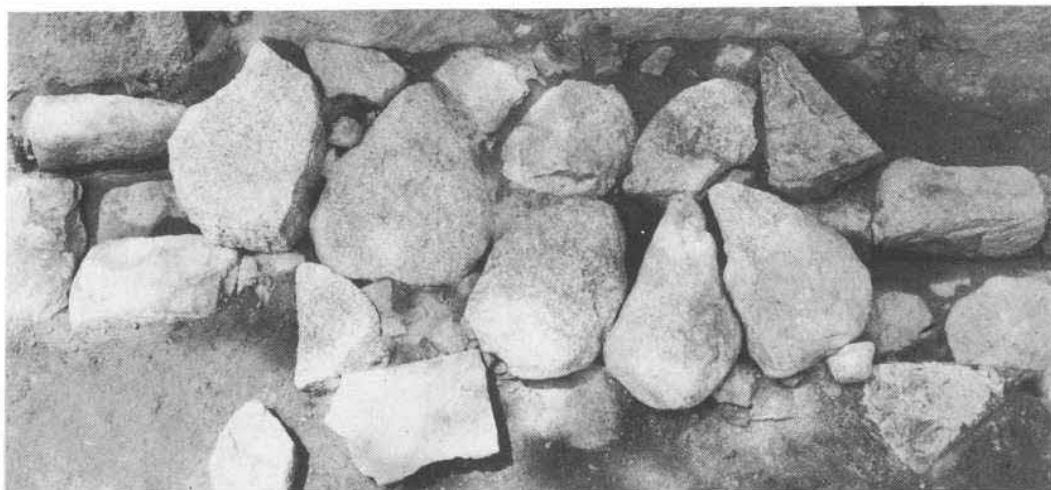
が平行四辺形に近い点からみると、さほど頑丈な建物ではなかったものと考えられる。



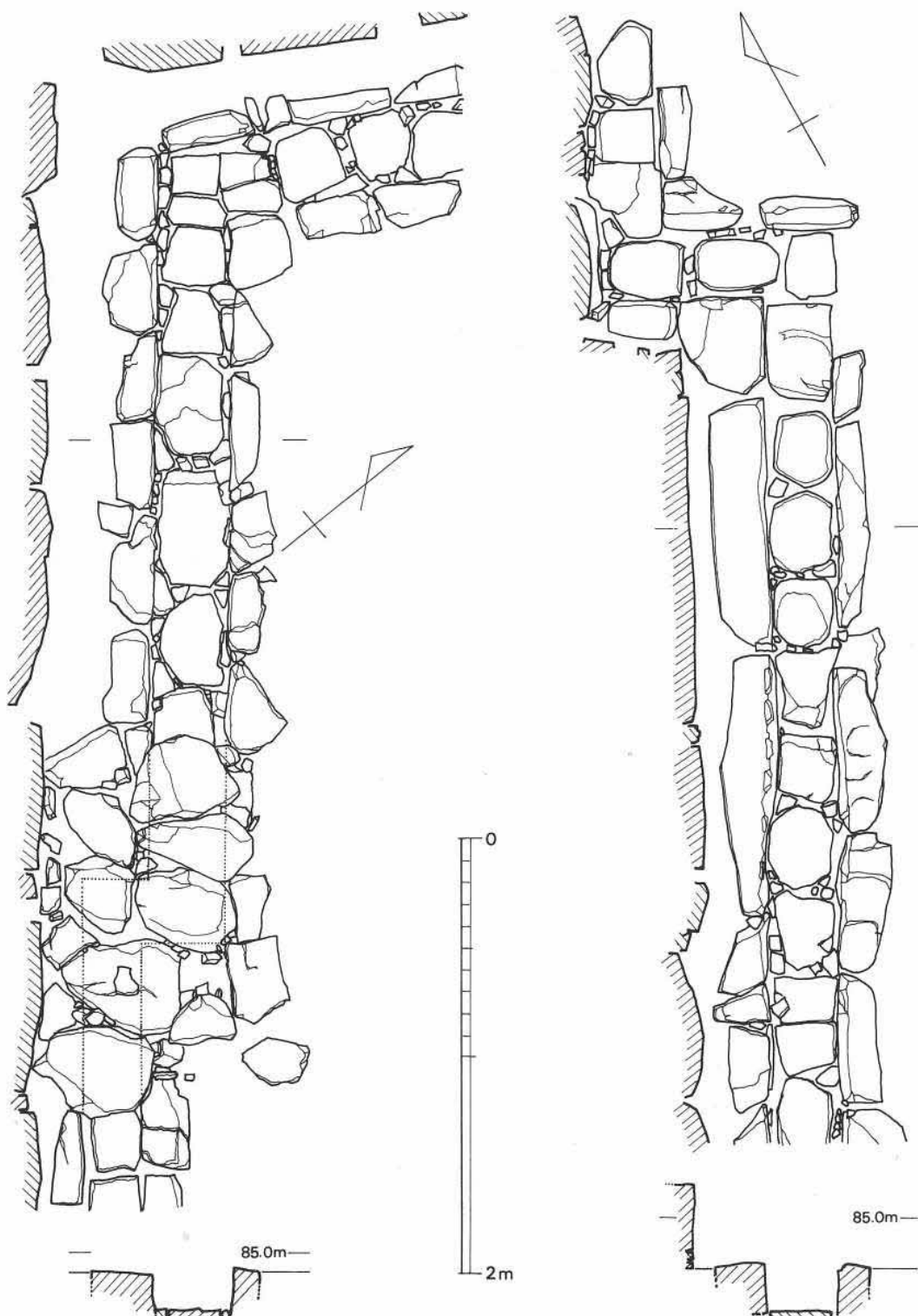
第10図 SB5 建物跡・SK6 土壌実測図 (1:30)

5. 排水溝（第11図：図版7b）

天守台南東隅から出発し、天守台石垣にほぼ沿って7回直角に屈曲して、北渡櫓石垣裾へ向かう。そこで80度東に屈曲して、10.5m直線状に東にのび、2回直角に折れる。一方、その終点については、破壊されて明確にすることができない。総延長は、27.7mで、幅30～35cm、深さ15～22cmを測る。レベルは、出発点付近で、84.5m、北渡櫓の屈曲点で、84.25m、終点で84.2mである。溝は、辺長30～50cm、厚さ15cm程度の板石を組んでつくられ、石敷の上には、川砂もみられた。また、一部暗渠の部分（幅1m、長1.8m）もみられる。この排水溝の性格については、はっきりしない点がある。



上・排水溝暗渠部 下・排水溝北東部

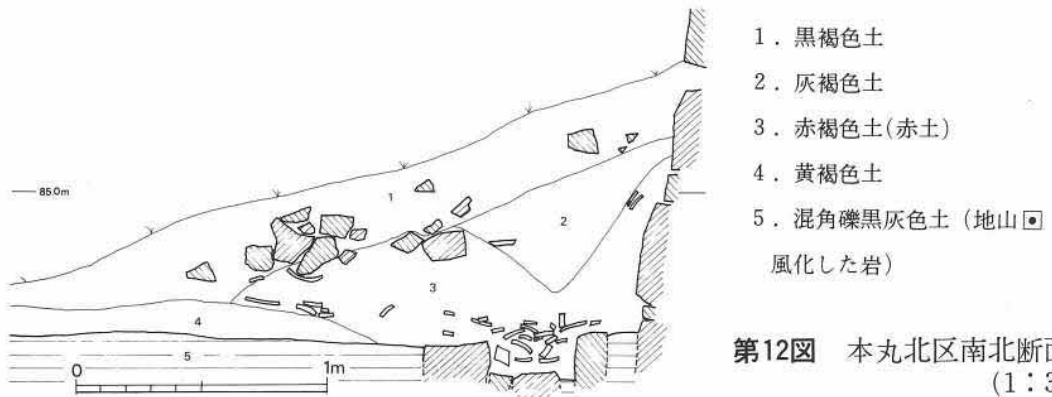


第11図 本丸排水溝部分図 (1:30) (左・暗渠部 右・北東隅終点部)

Ⅵ. 出土遺物

A. 出土状態 (第12図：図版9)

付櫓、天守台、北渡櫓の石垣を覆うように堆積した土(赤土が主)の下部から大量に瓦が出土した。瓦は、ほとんど10~20cmの破片で、その量は、土のう約250袋に達した。瓦には、平・丸の他、軒平・軒丸・鳥衾・鬼・谷丸などやや特殊なものもみられた。その他の遺物として、瓦の脱落を防ぐ釘や鋸等の鉄器類の他、わずか1点ではあるが、「者」の字が陰刻された青磁がみられた。



第12図 本丸北区南北断面図
(1:30)

B. 各個の遺物

1. 瓦 (第13・14図：図版10・11)

軒丸瓦 (第13図1. 2. 4)

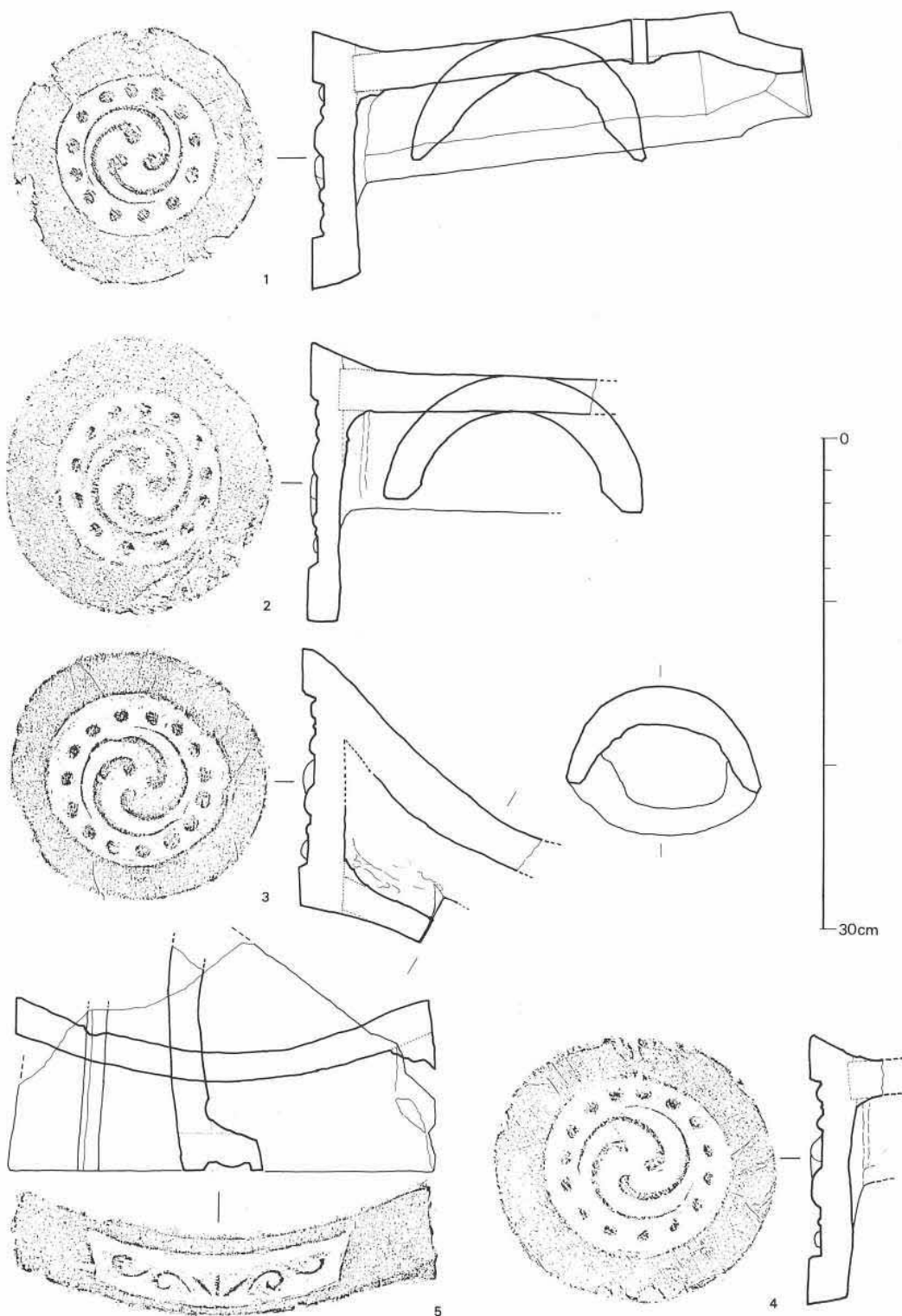
いずれも巴瓦であるが、珠文の数が、13個のもの(1. 2)と15個のもの(4)の2種が認められる。瓦当面中央に、尻尾の長い三ッ巴文を配し、その周囲に珠文をめぐる。全長30cmで、長3.5cmの玉縁が付き、胴部には、径9mmの円径のつり穴がうがたれている。瓦当面の径は15.5~17.0cm、外縁幅3~3.5cmで、厚さは約2cmを測る。

とり ぶすま 鳥 衾 (第13図3)

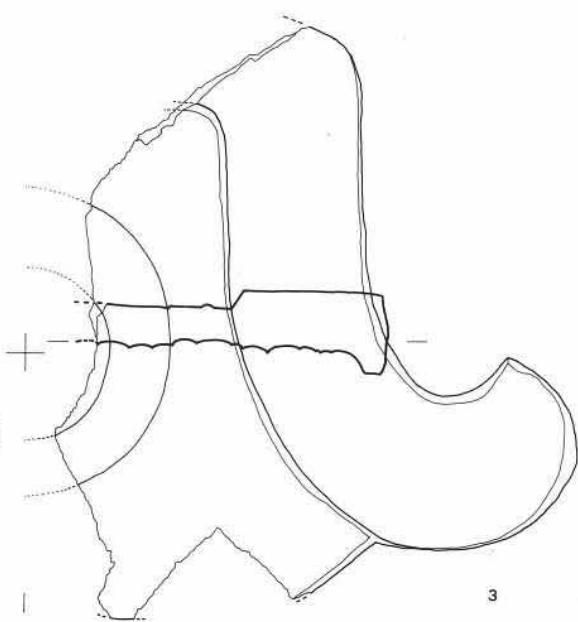
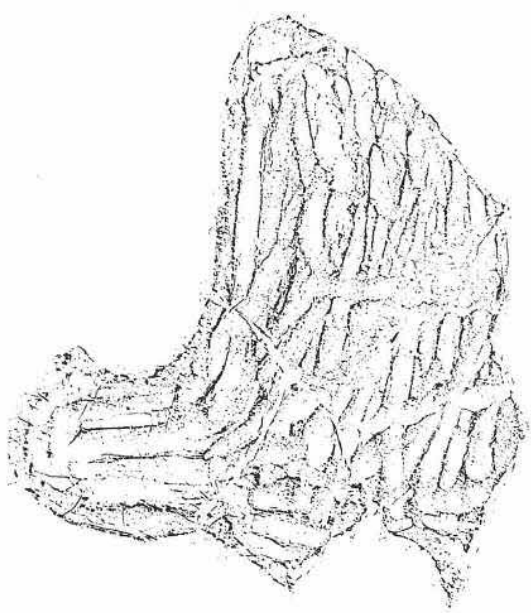
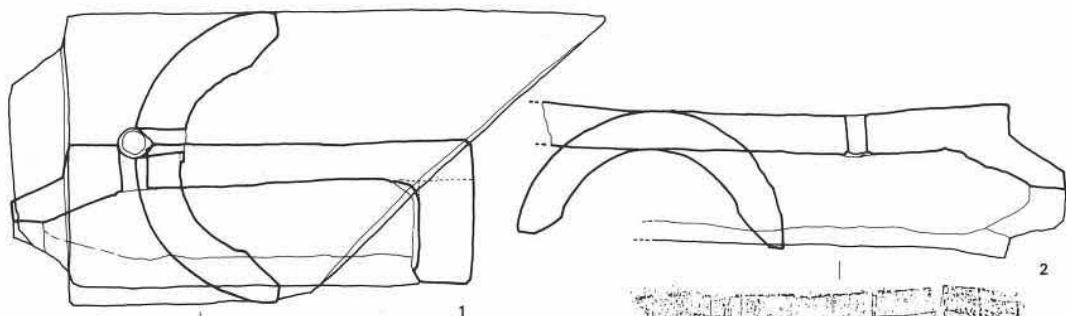
鬼瓦を固定する為の瓦で、瓦当面は軒平瓦と同じである。珠文は15個である。瓦当と丸瓦は、約30度そりがあって取り付けられている。丸瓦内面には、接合の為の指頭痕、ヘラ痕が顕著に残っている。胴部にはタテ方向のヘラ磨きが著しく残る。

隅唐草 (第13図5)

瓦当面の中心に、三ッ葉状の中心飾を入れた均整唐草文である。右の隅瓦で、焼成



第13図 本丸出土瓦実測図Ⅰ (1 : 4)



0 30cm

第14図 本丸出土瓦実測図Ⅱ (1 : 4)

前に、平瓦部の右半部を三角形に取り除いている。上弦幅26cm、弧深3cmを測り、平瓦のもとの長さは約26cmであったと考えられる。

谷丸瓦（第14図1）

垂れが左むきにつく、左の谷丸である。胴部の右隅をほぼ中央から切り捨て、さらに先端部になる面を閉鎖している。全長31.6cm、玉縁長2.8cm、胴部径14.4cmを測る。尻から3cmの所に、径1.5cmのつり穴があげられている。

鬼瓦（第14図3）

丸頭形のものと思われる。外縁は、ゆるく反りあがり、中央は欠失していて不明であるが、その周縁には約1mm低くした円形帯がある。内面は、ヘラ削りが顕著である。

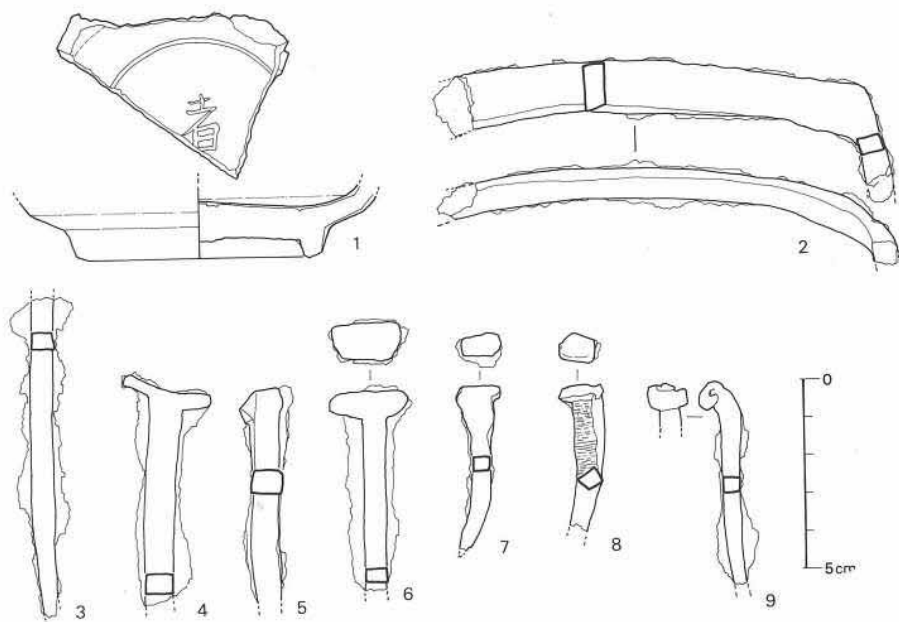
2. 青磁（第15図1）

底径6.5cmを測る小皿である。釉は、底部の一部を除くほぼ全面に、厚くかかる。淡緑青色を呈し、貫入は著しい。器形は底部から体部にかけてかなり内湾してたちあがる。底面見込みに「者」の字があり、その外周に1条の沈線がめぐっている。

3. 鉄器（第14図2～9）

鋸（2）は、片方の端部を欠失しているが、全長約13cm程度と思われる。釘（3～9）は、瓦のつり穴にはさまって出土したものがあり、瓦の止め釘と思われる。いず

れも破片で全容は不明であるが、長約5～10cm程度で、断面は矩形（5～7mm）を呈している。

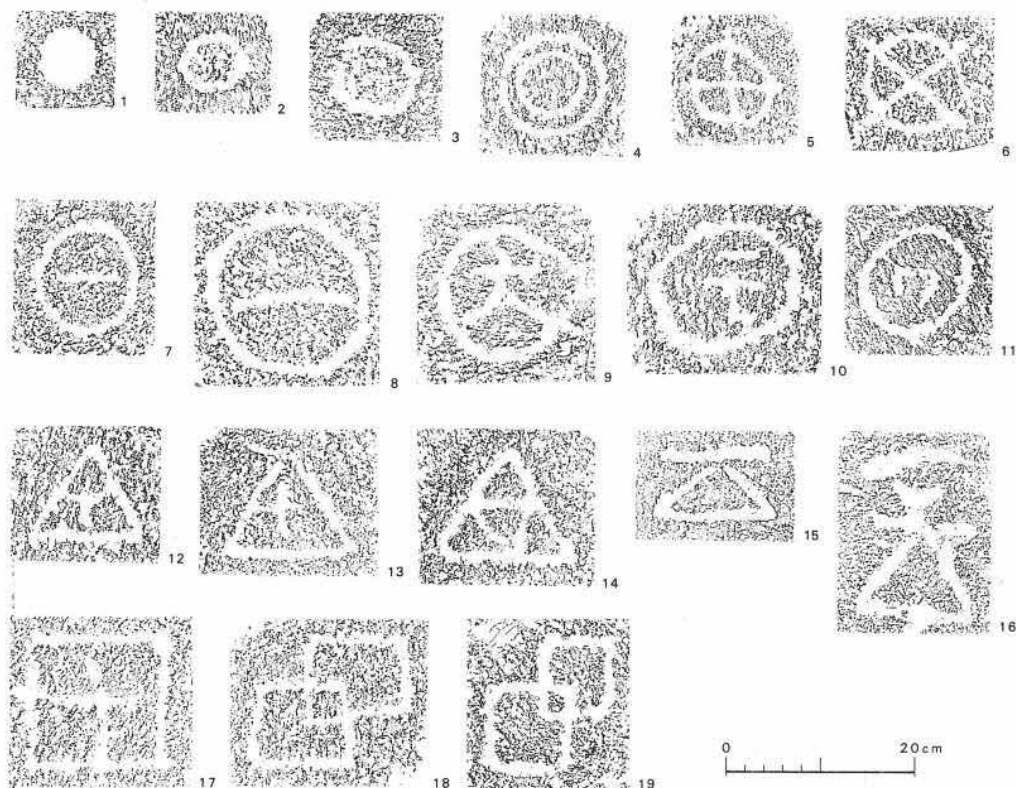


1. 青磁
2. 鉄鋸
3～9. 鉄釘

第15図 本丸出土遺物実測図（1：2）

C. 石垣の刻印

三の丸・有の丸においてみられる刻印を分類すると、3種7類が認められた。刻印の形によって、Ⅰ＝○、Ⅱ＝△、Ⅲ＝□の3種に大きく分けることができる。Ⅰは、さらに細かく3類に分けることができる。即ち、a類＝○を面で彫るもの(1)、円形に線を彫るもの(2)、二重丸に線を彫るもの(3・4)、b類＝＋、×、－などの記号を円内に彫るもの(5・6)、c類＝文字(漢字・カタカナ)を円内に彫るもの(9・10・11)である。Ⅱは、細かく2類に分けることができる。即ち、a類＝さらに△を彫るもの(14)、b類＝記号(＋や－)を組みあわせて彫るもの(12・13・15・16)である。Ⅲも細かく2類に分けることができる。即ち、a類＝さらに□をスライドさせて彫るもの(18・19)、b類＝記号(＋)を中に彫り込むもの(17)である。刻印の大きさは、7cm四角におさまるもの(1・2)から17cm四角におさまるもの(8)があるが、ほとんどのものは、13～15cm四角におさまる。三の丸、有の丸以外の石垣を精査すれば、さらに種類が増えるであろう。



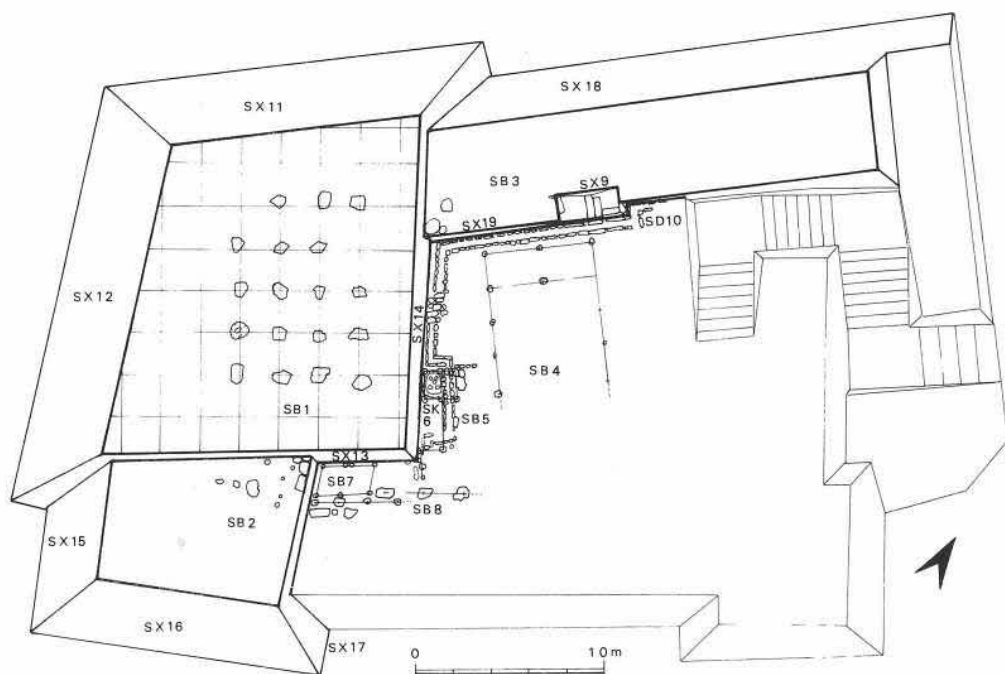
第16図 石垣刻印拓影(1:8)

Ⅶ．総括

亀居城跡は、福島正則によってつくられた、近世初頭の平山城である。調査は、公園整備に起因するもので、遺構の確認を目的として行なわれた。2次にわたる調査の結果、本丸において多くの遺構・遺物を検出することができた。以下その成果を要約して、まとめにかえたい。

本丸のほぼ全域を調査したが、既に破壊されたり、最近の整備工事が東半部・南辺部において既に終了している為、遺構の全容を把握できない部分が多かった。本丸全体の平面形は、東西約45m、南北約30mの不等辺四角形である。本丸では、天守台・付櫓・南北の渡櫓の他、建物跡3、土塋1、排水溝1を検出した。また、整備工事の際出現した北辺・西辺の石垣は、一部崩壊が進んでいたものの、良い残存状態であった。特に天守台西側の石垣は、極めて良く残存していた。

天守台の平面形は、不等辺四角形で、しかも全ての辺が柱間寸法では割り切れない。東辺と南辺は、ほぼ直角に近く(95°)、寸法の端数も比較的小さい。一方、北辺と西辺は、寸法の端数が大きく、しかも斜交(109°)している。この柱間寸法の端数の処理は、非常に困難なものであったと考えられる。礎石の柱間は、東西7尺、南北7.5



第17図 本丸石垣復元想定図 (1:400)

尺の等間で、天守台面積は、東西、南北各7間分の広さがある。

付櫓は、天守台の南側に、斜めに取り付けられている。プランは、天守台同様、不等辺四角形である。天守台にもみられるこの歪みは、地山の性質に起因するものと考えられる。なお、付櫓の礎石は、残りが少なく、柱位置を特定できなかった。

渡櫓は、いずれも東西方向にのびるもので、天守台北東部と付櫓に取り付くものであった。北渡櫓の南辺には、石階段が取り付けられていて、天守への通路の一部がはつきりした。しかし、東半部では既に保存工事が進み、旧時の状態が不明であることや、礎石の残存数が少ないので、その全容については明確にできない。

建物跡は、前記のもの他、3棟分検出できた。SB4建物跡は、2×4間分の礎石を検出したが、北渡櫓との間隔が非常に狭いのが気掛りである。SB5建物跡は、SK6土壇やSD10排水溝を覆う建物である。SK6土壇の性格は、明確な決め手はないが、その規模・底に置いた石などからみて、大きな容器を据え置いたとみられ、風呂ないし貯水の為の施設と考えられる。SB7建物跡は、付櫓・南渡櫓・天守台にはさまれる位置にあることと、礎石の大きさやプランがねじれていることからみて、付櫓への木階段ではないかとみられる。以上の3棟は、いずれも礎石の規模が比較的小さく、建物自体もさほど大きなものではなかったと考えられる。

排水溝は、全ての遺構の中で最も良く残っていた。起点と終点のレベル差は、約30cmあるものの、さほど良い排水効果はもっていない。一部暗渠にしていることと、SK6土壇を避けて屈曲しているのは、排水溝の性格を示唆しているようでもある。

瓦の他、鉄釘・鉄鏝・青磁がみられた。瓦の量は、極めて多量であったし、鳥衾・鬼・谷丸などの特異なものもあった。軒丸瓦は巴文で、珠文の数から2種に分類できた。軒平は、均整唐草文で、中心飾は三葉状のものである。鬼瓦は、約1/3個分の破片で、中心部は欠失している。谷丸瓦の出土は、その出土位置からみて、天守台と北渡櫓の屋根に谷が存在したことを暗示している。鉄釘は、出土状態からみて、瓦のつり穴に打たれて、脱落防止の役割を果たしたものである。陶磁類は、青磁のみであった。

亀居城跡は、連立式天守を持つ平山城で、17世紀初頭に建設され、短期間のうちに破壊させられた。使用期間が限定され、かつ良好な残存遺構があることは、近世初頭の城郭研究の為に好資料を提供するものである。